5　豚の胸腔内腫瘤（好酸球の浸潤を伴う真菌に因る肉芽腫性炎）

機関名：豊橋市食肉衛生検査所　　氏名：松田　克也
動物名：豚　　品種：LW　　性別：雌　　年齢：３歳
病歴　：不明
生体所見：健康畜として搬入され、特に異常は認めなかった。
内臓所見：肺の肋骨面、肺胸膜付近を中心に淡赤色、表面に隆起を伴う直径 3～9cm の腫瘤が十数個存在。一部の腫瘤は中央が陥凹していた。腫瘤割面は、中心部が不整形で赤色～灰黄色であり、その周囲は白色均質、硬固であった。腫瘤は肺実質と境界明瞭で、腫瘤近くの小葉間結合織は著しく肥厚していた。胸壁では脊柱付近を中心に、肺で認められた腫瘤と酷似した白色腫瘤が多数存在し、周囲との境界は明瞭であった。胸膜腔には繊維素が析出し、右肺前、中、後葉、左肺前葉が胸壁に癒着していた。肺リンパ節、気管気管支リンパ節、縦隔リンパ節は硬結し、割面は白色線状物が網目状に存在していた。その他の臓器等に著変は認められなかった。
組織所見：腫瘤は、中心部の不整形部位に一致して壊死巣が島状に存在。壊死巣内には PAS 陽性、直径 5～18μm の菌糸が存在していた。菌糸は中空状で、隔壁は認められず、分岐は不規則で短かった。壊死巣の周囲は好酸球を混じた膠原線維と、毛細血管の増生を認め、壊死巣全体を取り囲むように類上皮細胞主体の炎症細胞が浸潤し、ときに異物型巨細胞が認められた。さらにその外側はリンパ球、好酸球の層があり、最外層は好酸球の浸潤を伴う結合組織により被包され、周囲組織との境界は明瞭であった。肺リンパ節は白色線状部位に一致して発達した結合組織がリンパ組織を島状に区画していた。気管気管支リンパ節、縦隔リンパ節も同様であった。
固定方法：10％中性緩衝ホルマリン液
行政処分：一部廃棄
組織診断名：好酸球の浸潤を伴う真菌に因る肉芽腫性炎
疾病診断名：真菌症